

●書評

BR

B O O K R E V I E W

『がん・生殖医療——妊孕性温存の診療』

(日本がん・生殖医療研究会 監修/鈴木 直・竹原祐志 編著)

・B5判, 312頁, 医歯薬出版刊

・定価 本体 10,000円+税



“がんの根治と妊娠力の温存”，タイムリーな話題を一冊に凝集！

わが国の少子・晩婚化問題は女性に限るものでなく、男女ともに結婚年齢は劇的に上昇し、初婚は男性が平均31歳、女性29歳となり、女性が初めて子どもを産む年齢も30歳を超えている。そのようななかで、男女ともに結婚前あるいは子どもをもつ前にかんを発症する機会が増加してきた。また小児のがんでは化学療法の進歩で治癒に至ることが多くなり、成長後には結婚し子どもをもちたいという欲求が急速に高まっている。

このような背景から、世界的に“がん・生殖医療”（oncofertility）が注目を浴びている。そして、これに対応するかのようになり、生殖補助医療（ART）においても画期的な進歩がみられ、精子のみならず卵子について、さらに性腺組織についても、凍結保存への道が開かれつつある。そして、婦人科がんにおいては妊孕性温存治療が広く行われるようになってきた。

今まさに、“がん治療”と“生殖医療”が融合する時代に突入したのである。これから乗り越えるべきさまざまな技術的課題、倫理的問題が存在する。しかし、「がんの根治と同時に、妊娠力も維持したい」という願いは人間としてあくまでも当然のことであり、この理想を追求しなければならないのである。その意味で、本書の出版はきわめてタイムリーである。画期的なことに、本書は、現時点で“がん・生殖医療”を実践する各分野の進歩がどこまで到達しているか、今何ができるか、どうすればよいか、一冊ですべてわかるように編集されたわが国初めての書である。また、本書の特長として、生殖の基礎知識や妊孕性温存に関する技術面のみならず、カウンセリングに必要な心理的なアプローチについても、非常に詳しく書かれていることが挙げられる。

今後、性別を問わず、小児がんの患者さん、生殖年齢のがん患者さん、今後も妊娠力を維持したいと願うすべての患者さんのがん治療において、“oncofertility”に関するご希望をあらかじめ聞いておかねばならない時代が到来する。がん治療にかかわるすべての医師とメディカルスタッフ、また遺伝カウンセラーには、是非とも本書を手近なところに置いていただき、がん患者さんとのインフォームド・コンセントにおいて参照いただきたい。

(京都大学大学院医学研究科婦人科学産科学, 小西郁生/ここにいくお)

がんのチーム医療を担うあらゆる職種の方々に必携のバイブル！

近年がん医療は、分子標的薬などを初めとした様々な抗がん剤の開発に伴い飛躍的に進歩し、治癒率も確実に向上しつつある。とくに、乳癌の領域では、他の多くのがん種と異なり、すくなくとも10年以上の生存率を達成することが目標となっている。しかし、癌を治癒に導くことが第一の目標であっても、生活の質を保ちつつ、その人らしい人生を送ることができるように導くことが肝要である。とりわけ乳癌は、50歳前後に、罹患年齢のピークがあるというものの、出産を希望する若年女性が罹患することもしばしばである。

2006年、米国臨床腫瘍学会（American Society of Clinical Oncology：ASCO）は、化学療法や放射線療法などの治療によって妊孕性を喪失する可能性のある患者を対象にした、妊孕性温存療法に関するガイドラインを発表し、それまで配慮が十分でなかった“治療後の妊孕性”に対して注意喚起を促した。そのなかでは、まず、治療対象となる患者の年齢および選択肢となっている薬物療法によって不妊となるリスクを説明すること。また、その治療を受ける前に妊孕性温存に関する専門家を紹介し、各種方法に関する内容および温存できる確率や必要な費用についての説明を受ける機会をつくること。さらに、癌の治療を始める前に、選択しうる妊孕性温存療法がある場合には、治療に支障をきたさぬ範囲にて、その機会をつくることが求められる。この対応は、男性のがん患者においても同様である。

しかし、担当医のみにより、限られた診療時間の中で、必要不可欠な情報を上手に伝えることは決して容易ではない。そこで、この問題に精通した看護師や臨床心理士を交えたチームアプローチが望ましく、そのうえで、生殖医療の専門家とのコミュニケーションをとることができれば、よりスムーズな連携が図れる。難度の高いハードルではあるが、がんのチーム医療がどの程度うまく機能しているかを知るためのバロメータともいえよう。

本書は、チーム医療を構成する幅広い観点から、妊孕性温存に関する様々な問題点とその解決策を、大変わかりやすく述べている。がんのチーム医療を担うあらゆる職種の方々に必携のバイブルとなるであろう。

（昭和大学医学部外科学講座乳腺外科学部門、中村清吾/なかむらせいご）

* * *

B O O K R E V I E W
BR